

学 位 論 文 審 査 要 旨      公開審査日 2014 年 9 月 24 日 (水)

報告番号：    甲    第    1642    号	氏名：赤石   雄	
論文審査 担当者	主査    教授    後藤    浩    印	副査    教授    伊藤    正裕    印
		副査    教授    井上    茂    印
<p><b>審査論文の題目：</b> Validity of direct ophthalmoscopy skill evaluation with ocular fundus examination simulators            (模型による眼底診察能力の評価に関する外的妥当性)</p> <p><b>著   者：</b> Yu Akaishi, Junji Otaki, Osamu Takahashi, Raoul Breugelmans, Kimiko Kojima, Masayasu Seki, Takayuki Komoda, Shizuko Nagata-Kobayashi, Miki Izumi</p> <p><b>掲載誌：</b> Canadian Journal of Ophthalmology (in press, 2014)</p>		
<p><b>論文要旨：</b></p> <p>眼底診察用の模型を利用することにより、実際の患者に対する直像式の検眼鏡(眼底鏡)の技能をどの程度、評価可能であるかを検討した。また、客観的臨床能力試験(OSCE)など実技試験において、眼底鏡による観察技能における評価基準の作成を目指し、横断的研究を行った。</p> <p>評価には医学生、研修医、指導医 73 名が参加した。眼底鏡技能は、(1)経験：無散瞳での眼底診察経験、(2) 頻度：直近 1 か月における眼底鏡の使用頻度、(3)観察可能範囲：観察できる眼底の範囲、の 3 項目で評価した。眼底診察用模型には瞳孔径を 2mm、3.5mm、5mm に調整できる模型を使用し、さらに本研究のために観察用のスライドを作成した。これらを利用し、各瞳孔径ごとに眼底のスライド読影の正解数を計測した。</p> <p>その結果、無散瞳での眼底診察経験数で分けたグループ間では、瞳孔径を 2mm、3.5mm に設定した場合に有意差がみられた (<math>P</math> value=0.008、0.007。)観察可能な範囲で分けたグループ間では、各瞳孔径における模型観察による正解数に有意差はなかった (2mm：<math>P=0.103</math>, 3.5mm：<math>P=0.083</math>, 5mm：<math>P=0.347</math>)。</p> <p>“無散瞳での眼底診察経験数”、“観察範囲”と模型を利用した眼底鏡の技能には相関があることが示された。また、“無散瞳での眼底診察経験数”は、模型を利用した眼底鏡の技能と強い相関がみられた。</p> <p><b>審査過程：</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 本検査の目的と意義について改めて説明がされた。</li> <li>・ 直像鏡による今回のような試験、あるいはトレーニングの積み重ねが、実際の臨床に生かされる可能性について説明があった。</li> <li>・ 医学生の技能評価、すなわち OSCE としての本検査の位置付けについて妥当な説明があった。</li> <li>・ 得られた結果の統計学的解析法について回答が得られた。</li> <li>・ 本研究の目的のひとつであった評価基準の作成については道半ばとの回答であった。</li> </ul> <p><b>価値判定：</b></p> <p>本研究は、眼底診察用の模型を利用した直像式検眼鏡による眼底観察が、技能評価法として一定の意義のあることを示した研究である。OSCE の一環として国際的にも広く実施されている本試験の意義と方向性を明らかにした点は、今後の医学教育における評価法を考えるうえで示唆に富んだ研究であり、学位論文としての価値を認める。</p>		